

(社) 東洋音楽学会 東日本支部第 137 回定例研究会 発表要旨

日本近世中期の儒学者による「楽」の歴史研究の諸相

中川優子 (東日本支部)

近世の日本において儒学者をはじめとする知識人たちが楽律の研究を行ったことはよく知られており、中村惕斎 (1629~1702) や荻生徂徠 (1666~1728) 等の営為を中心として、近年はその研究内容についても詳らかにされつつある。そしてそれらの楽律研究においては、古の黄鐘 (こうしょう) を求めるにあたって中国の歴代王朝におけるその変遷を知るに至り、必然的に楽律を中心とする音楽史の研究へとつながっていった側面があることも指摘されてきた。他方、熊沢蕃山 (1619~1691) や貝原益軒 (1630~1714)、あるいは新井白石 (1657~1725) など、いわゆる楽律研究の文脈には位置づけられてこなかったものの礼楽の「楽」や雅楽に高い関心を寄せた儒者たちも、先王の定めた「楽」の展開についていくぶん見解を述べており、とくに新井白石に至っては漢代以降の雅楽についても一定の見通しをもった議論が見受けられる。

本発表では、とくに近世中期を中心として、これらの「楽」の史的展開にかかわる儒学者たちの理解の様相を整理してみたい。当時の「楽」の史的展開をめぐる議論は主として、彼らの理想とする中国三代 (夏・殷・周) の「楽」 (古楽) がいかにして受け継がれていったのか / いかなかったのかといった問題意識のもとに育まれたとあってよいだろう。そして古楽と日本の雅楽との関係を探り、あるいは礼楽思想のもとに当時の実際の音楽文化にも目を向けていた彼らの「楽」にかんする議論が歴史的な視座を含んでいることは、雅楽を中心とする当世の音楽文化にたいする彼らの思想的態度を考えるうえでも重要だと思われる。本発表によって、これまで主に個別の検討が進められてきた近世日本の知識人たちによる「楽」へのアプローチの俯瞰を試みるとともに、近世日本の音楽をめぐる学問的・思想的な営為を当時の文脈に即して理解するための一助としたい。